チーク材で出来ていたとある。

⑤ この部分の読み方はハンゼン氏上掲書p.14によつた。

⑥ 原文には"不死なれかし。余が……"とある。以下にも散見されるが，王に対するときは"余"に代えるに"臣"の語を以てすることとした。

⑦ 近代ペルシア語形はBuzurǧmihrであるが，統一をとるために中世語形を用いる。従つて，シャーフナーメの場合でも，その近代語形シャトランジュ（šatranǧ）の代りにチャトラング（čatrang）を用いる。

⑧ Ferdowsi's Shahnameh edited by Said Naficy, vol.VII, Teheran 1935 p.2461f.（以下ŠnT.と略記）およびHistoire des Rois des Perses par Tha'ālibī par H.Zotenberg, Paris 1900, p.622f.（以下Tha'ālibīと略記）。

⑨ S.Wikander: Feuerpriester in Kleinasien und Iran, Lund 1946, p.164, c.n.3.

⑩ E.Herzfeld: Archaeologische Mitteilungen aus Iran III/1 (1930) p.28~Zoroaster and his World, Princeton 1947, p.627参照。氏によればNēv-Artaxšēr>Nartaxšēr>Nart/Nard.

⑪ J.C.Tavadia: Die mittelpersische Sprache und Literatur der Zarathustrier, Leipzig 1956, p.140.

謝辞と報告

加藤一朗

昨夏本研究会から派遣されて田中琢（考古学専攻），高林藤樹（東洋史専攻）の両君と行いましたイラン及びアラビアの調査旅行は，夏休を利用したもので期間も短く資金の面でも決して充分なものではありませんでしたが，それにも拘らず本研究会顧問の諸先生，会員諸兄，その他の方々から有形無

形絶大の援助を賜わることなしには，実現することはできませんでした。ここに深甚の謝意をさゝげたく存じます。

ことに会長の足利先生はじめ，終始御指導をいただきました宮崎，中原，岩村，藪内，羽田の諸先生，イラン旅行の先達である岡崎敬，吉田光邦の両氏，資金を提供された白木屋の高橋社長，民主教育協会の理事諸氏，医療品を提供された武田薬品の諸氏，日章丸便乗の機会を与えられた出光興産の手島総務部長及び船舶部の各氏，新田船長はじめ日章丸乗組員諸氏，外務省の井上，山志田両事務官，日本交通公社の岡本海外旅行部長，留守中の事務を担当された岡崎正孝君，鈴木千恵子さんの名前をあげて謝意を表せざるを得ません。

さて吾々は昭和３２年７月２２日徳山発，海路20日，8月10日未明サウディ・アラビアの石油積出港ラスタヌラにつきました。上陸手続上の行違いから全1日船内に待機しましたが，夕刻上陸，親日家マホメット・サルマン氏の申請によつて，この地方の知事でイブン・サウドの王の兄弟ビン・ジャラウィ殿下の厚遇にあずかり，ダハラン飛行場地区にあるエアポート・ホテルに起居，出入国手続の完了とアバタン行飛行の便を待ちました。この間10日ありましたが，手続の為にいつサルマン氏から連絡があるか予測できませでしたので，主にホテル内で待機しました。ただたまたま連絡のとれました日本婦人を妻とするアラムコにつとめる地質学者モリス氏の好意で，氏及びその友人がカチーフ地区及び半島南部地方で蒐集した土器，石器の類を撮影する機会をえました。このように東アラビアの遺物はアラムコにつとめる地質学者達の手で蒐集されつつありますが，発掘は容易に許可されないということでした。

このアラビア滞在は全く日章丸のスケヂュールの結果でしたが，この為に吾々はアラビアの風土に接し，海原の如き砂沙漠を眺め，且アメリカの巨大な石油資本の活躍，現地人の遊牧生活からアメリカ的生活への移行等をつぶさに見聞することができました。しかし１０日間はここで無為に過された感もあり，且つこの往路の経験から帰路のアラビア経由の為にもかなりの額の費用

と約一週間の日数を考えおかねばならぬことがわかり，本来の目的地であるイランにおける旅程を大巾に割愛せねばならぬことになりました。この帰路に関する不安からもし必要以上にイランの旅程その他を削つて充分成果を上げえなかつたとしたら，隊長であつた私の責任です。

8月20日ダハランからアバダンに飛びました。この間1時間20分。当地に一泊。翌21日ホラムシャー駅から汽車で北上，22日夕テヘランにつきました。車中アッシリア人の子孫と自称するバグダードの商人と同席したのは一つの想出です。テヘラン滞在中はテヘラン大学当局者の好意でユニバーシティ・クラブ（外国留学生寮）に起居することができ，同大学に留学中の井本英一（京都大学），加賀容寛（東京大学）両氏に種々世話になり，爾後殆ど吾々と行を共にされた井本氏のたんのうなペルシア語が吾々の旅行をどれだけ助けてくれたか計り知れません。吾々はここで山田大使はじめ，大使館の人々に挨拶に行き，滞在及び出国の手続を予め依頼し，商社の人々のことずてをつたえ，博物館を見学，市街の一部を見，且つ海抜千数百米の高原に体を慣れさせる為に数日を費しました。テヘラン滞在中の圧巻は博物館見学でした。

8月27日早朝テヘランをたちバスでシラーズに向いました。この日はイスパハンに泊り，江商の清水氏，外務省の加藤氏の案内で美しいイスパハンの広場，故宮，バザール，シャー・アッバスの石橋等を見学しました。翌1日再びバスにゆられて，イラン高原の平地と丘陵との交錯するパノラマをあかず眺めながら夕刻シラーズ着，吾々に適当した宿ハーフィーズ・ホテルに入りました。ここに約一週間滞在，吾々は連日バザールに足を運びましたが，結果からいつて調査というよりも見学に近かつたかも知れません。とりわけ信仰心の厚い人々で構成されているこのシラーズのバザールの調査には吾々が机上で計画していた時は想像もつかなかつた数々の困難が伴い，田中，高林両君の果敢な努力にもかかわらず，充分成果をあげえたとは申されません。なお吾々には帰路アラビアに要する費用のことが絶えず念頭にあり，附近の史蹟の調査もペルセポリスとナクシルスタムに限らざるをえませんでした。かえすがえすも残念でしたが。

9月5日シラーズをたち，再びイスパハンに一泊して，6日テヘランにもどりました。この時吾々は丁度遊牧民の移動に行きあい，人。馬。らくだ。羊。山羊。犬。鶏からなる大部隊の移動を観察することができました。2日間にわたるカシャン行を除いて吾々は再びテヘラン大学構内に起居，博物館。民族博物館，バザール等を見学，両君は更に美術局，王宮やデマバンド山麓にも足をのばしました。テペ。シアルクその他からの完全な出土品を多く蔵するユダヤ人の店も訪れました。吾々はまた吾国にも来たことのあるファルギー博士，私の旧友ネガバン博士の家庭にも招かれ，大使館主催の小宴，大学主催のパーティーにも招かれて，イランの学者達と親交を深めました。

9月15日16日にわたるカシャン行に吾々はハイヤーをやといました。まずレイ，ヴァルミンを訪れ，先史時代，ササン朝，モンゴル時代の遺跡を訪れ，拝火教の「沈黙の塔」も見学しました。テペ。シアルクではギルシマン博士発掘のあとをしのび，帰路の飛行機の利用にもさしつかえない程度で土器片の蒐集を行いました。

しかしテヘランに帰つてから，避暑客の帰還の為にテヘラン。アバダン間の列車に座席を予約することが不可能なことがわかり，私の独断で，イスパハン経由，空路アバダンに出ることにしました。このことによつて乏しい資金をより乏しくしたに違いありません。或いは後になつて考えれば，バスを利用してスーサをまわることも可能であつたかも知れません。しかし一度バスで旅行した地域を空から眺める機会をえたということは，それなりに意義がなかつた訳ではないと思います。

かくて吾々は9月20日朝テヘラン飛行場をたち，正午近くアバダン着，暑気のおとろえぬ当市のホテルの屋上のベッドでラウド。スピーカーから流れてくる説教の声を耳にしながら二泊。22日再びKLMでダハランに飛び，ここでマホメット。サルマン氏と再会，再びすべての手続を彼がひきうけてくれました。ラスタヌラ港のカヌー事務所の一室で待機，28日夜入港した日章丸に29日乗船，30日出航，10月20無事神戸港にて上陸いたしました。

（研究的な，もしくは印象的なより詳しい報告をする義務を感じて居ります

が，今冬以来健康を害して居りますので，他の機会を得たいと思つて居ります。）

「マネージャーの立場からイラン旅行に就いて」

高　林　藤　樹

昨年実施されたイラン学術調査旅行は，異国の歴史を研究する者にとつて，現地の風物に親しく接する事程有効な学習手段は他にないと言う立前から夙にその実現を望まれて居たが，本当に計画が具体化したのは昭和３１年も押詰つた１２月の末になつてからであつた。此の年は吉田光邦氏による探険部学生のイラン旅行を初め，井本氏のテヘラン大学留学やファルギー教授の来訪などあつて，頗るイラン熱の昂つた年であつた。本会の旅行は計画が進められ始めてから出発まで殆ど７ケ月もかゝつて漸く実現したのであつたが，今振り返つて見ると，馴れぬばかりに随分多くの労力を費した事が知られる。当時は勿論充分な考慮を払いつつ行動したのであつたが，大抵の事が初経験で，へまも相当多かつた様である。以下，マネージャーの立場から思い出すままに色々な問題に就いて反省を加えて見たい。

此の旅行は特に大規模な発掘をする訳でもなく，又，採集等を目標としたものでもなかつたから，準備も取り立てて言う程の困難はなかつたのであるが，予算も乏しく経験も無い所から必ずしもスムーズには行かなかつた。先ず計画の最初に当面したのはコースの選定であつた。前年は吉田氏の探険隊，その前年にカラコラム探険隊等がイランへ行つて居り，それ等諸先輩の意見は可能な限り広く聞いて参考にした。その結果，研究会の性格乃至参加メンバーの専門も斟酌してシーラーズのバザールをオ一目標に選び，少い予算と日数を有効に使うためあまり広く歩かずに重点的調査の出来るように考えた。往復の交通や現地での生活等は経験者の助言を容れそのまま踏襲す